

# まんだら通信

第149号 (通巻181号)

平成20年(2008)11月 佛誕2574年

295-0103 千葉県房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/post@shiunji.org>



## あのときは、ありがとう

「ありがとう」は妙薬です

寝屋川市 金森千枝子(63歳)

「お母さん、僕にありがとうと言ってくれた人がいた。僕でも人の役に立つことができるんだね」

と、台所仕事をしている私に三十歳の息子が帰宅早々泣きながら言いました。息子は卒業後、東京の大手の会社に就職し、五年ほどで人間関係に疲れ果て、うつ病を背負って帰ってきました。

「死にたい、死にたい」が口癖の毎日が続いていました。

あの日は、ちよつと気分がよいから友人のところへ行つてくると外出したのですが、帰りに駅で目の不自由な人が、ややこしい乗り場でウロウロされているのを見るに見かねて声をかけ、その方の乗り場に案内してあげたそうです。

帰ろうとしたら、その背中に、「ありがとう、ありがとう」を何回も言われたとか。

自分はこの社会で役に立たない人間で、生きていても仕方ないんだと、死ぬことばかり考えていた息子が、人様から

「ありがとう」と言われ、涙が止まらなくなり、泣きながら家に帰ってきたとのこと。

「よかったね、よかったね」

と答えた私こそ、その人にお礼が言いたいのです。

あれほど心も身体も沈んでいた息子が、その方の「ありがとう」の一言がきっかけで、少しずつ病気もよい方向に向かい、今では病院通いをしながら仕事にも就き、親から離れて独立した生活ができるようになったのですから。「ありがとう」は何にも勝る妙薬です。

## やさしい洋品店

長野県穂高町 宮田泰子(49歳)

「五時五十六分、ご臨終です」

主治医の先生が、腕時計を見ながらおっしゃった。実父が亡くなった。姉と二人で父の最期を看取った。他の姉たちも母も夫も間に合わなかった。

「だって先生、まだ温かいです。生きていますよ？」

姉は取り乱して泣いた。

「姉さん、姉さん！もうダメなのよ」姉の肩を抱いて私はそれしか言えなかった。そんな私を看護婦さんが廊下へ呼び、旅立ちの準備をしてくださるよう言った。初めてのことで何か何だかわからない。看護婦さんは、メモを渡すと洋品店で揃えるように言った。

私はメモをにぎりしめ、近くの洋品店へとんだ。メモを見せて、用意してもらったから、「あつ、お金が足りない」と気づいた。すると、「落ち着いてからいつでもいいですよ」

と、店主らしい白髪の夫人が言ってくれた。

葬式が終わる翌日、職場や、救急車でお世話になった消防署、そして病院へお礼の挨拶に伺った。

最後にM洋品店へ支払いに行った。あの日の婦人が出てきて、「お葬式

大変でしたね。これからドツと疲れが出てきますから……」

と優しいねぎらいの言葉をかけてくれた。喪主として、ずっと気を張って頑張ってきたものがプツンと切れた。涙がどつと甜れてきた。とめどもなく涙が溢れてきた。

## 父の初メール

東京都中野区 金田麻理(19歳)

私は風邪をひいて、二週間ぐらい寝込んでいた。

そんなある日、いつも通り寝ていたら、私の携帯電話のメール音が鳴った。送ってきたのは父だった。父からの初めてのメール。仕事の合間に送ってくれたらしい。

とてもごちない感じで、でも、一つひとつの言葉がすごく温かくて、涙が止まらなかった。すぐに保存した。家に帰ってきた父はいつもと変わらず、メールのことも一言も話には出さなかった。なんだか不思議な感じがした。

このことがきっかけで、父とよくメールをするようになった。言葉では話せないことを、メールだと素直に言える。父も同じなんだと思う。私はつらいとき、保存しておいたあの父の初メールで元気になる。

社団法人「小さな親切」運動本部が発行している『涙が出るほどいい話』の第九集からの転載です。

兎角、ぎくしゃくした気の滅入るような、暗い話が多いこの頃ですが、見回せば心温まるホツとするようなこともあるのです。

この第九集は、四年前の発行ですから、投稿した人のお歳はその当時のものです。

◆今日、11月7日は立冬。その言葉通り、明日は冬の気温になるとの天気予報です。季節の変わり目になりますね。お互い、身体の調子を保つよう、呉々も気をつけましょう。

◆去る10月26日、県の重要文化財、坂東観音霊場33番、結願の札所、那古寺観音堂の平成の大改修の落慶式が、お稚児のお練り行列を交え、総本山智山派の管長様をお導師にお迎えして華やかに執り行われました。

工事期間6年、総工費5億8千万円、檀徒1軒当りの寄進は72万円とか。

また、南条の観音寺様では不慮

の火災から8年、檀信徒皆さまの協力でのほど本堂が出来上がり、今月2日目出度く落慶式が行われました。

こちらは総工費1億800万円、一軒当たりのご寄付は58万円だったそうです。

ご負担はそれぞれ大変だった筈ですが、本尊様やご先祖への熱い思いが、歴史に残る大事業を成し遂げたわけで、だからこそ自分たちにゆかりのお寺が代々続いて行くのですね。

◆携帯電話、アイ・フォーンに買い替えました。今まで使っていたものと全く違い、「電話がついている携帯パソコン」でした。

◆6日、『白浜町歴史と散歩の会』(会長松井徳房さん)のお誘いで鹿野山神野寺、笠森寺、大多喜城、清澄寺に行ってきました。紅葉の時期には早いものの、晩秋の、暖かで風も穏やかな外出日和。大型バスに35人ぐらい、沢山の懐かしいお顔に会うことが出来ました。◆前にも取り上げたことがあるツワブキ【きく科タカラコウ属】です。晩秋から初冬の、山道が淋しくなった頃、ハツとするような鮮やかな黄色が印象的です。60年前、重いサツマイモを背負って山の畑から帰る時、目にしたことを思い出しました。

2008/11/09 龍渉



## 余滴

## 限界集落

過疎化が進んでいるこの辺りでも、まだ聞きなれない言葉ですが、インターネット上の事典ウィキペディアによると、高知大学の教授だった大野晃先生が平成3年に言い始めた考え方で、「過疎化などで人口の50%が65歳以上の高齢者になり、冠婚葬祭など社会的共同生活の維持が困難になった集落のことを指す。」のようです。

自治体の場合は、65歳以上の住民が人口の50%以上になると『限界自治体』になります。このまま行くと、更に進んで地域社会の生活そのものを営むことが出来なくなり、集落の消滅となります。

月刊誌『MOKU』11月号で、麗澤大学大学院教授の松本健一さん（他に評論家・作家・歴史家・思想家などの肩書きがあります）が『限界集落とは何か』という文章を寄せています。その中で、大分県竹田市の九重野集落の様子を、次のように書いています。

九月末に発足した麻生・自民党政権は、二十九日の首相所信表明演説で、「農業を直ちに保護の対象とする発想は捨ててゆかねばならない」とのべた。それはそのとおりなのだが、では日本農業の将来にどのような希望の光が見えるかを政府が提示するのでなければ、結局のところ、保護政策の中止は農業の切り捨て策に終わるのである。

農水省は昨年、小規模農家への補助金を廃止し、大規模農家への転換促進策を打ち出したが、日本の農業はその小規模農家、いわゆる「小農」によって歴史的に維持されてきたのである。

日本そのものが「小農」によって支えられてきた、といってもいい。

それに日本のように山がちな風土にあつては、田畑が細かく、いくつにも分かれざるをえない。アメリカや中国やオーストラリアのような、平地がどこまでも続く国とは、風土が異なるのである。

折口信夫のいう「海やまのあいだ」に狭められた耕地をもつ日本で、大規模農家への転換をすすめたところで、それは日本の

現実を無視した、官僚による机上の空論と化さざるをえないだろう。

日本農業の将来については、近代の工業中心の文明観それじたいの変革なしには展望を描けないだろう、というのが、わたしの考えである。しかし、そのことを論ずるためにも、まずは日本の農業地域の疲弊を象徴している九重野での見聞を記しておきたい。

九重野は、九州の中央部に聳える阿蘇山の麓にある祖母山系の、標高四〇〇メートルから六〇〇メートルに位置する、山間農業地域である。

日本の山村の典型といってもいい。九重野の主産業は農業であつて、その主産物は米、大豆、そば、カボス・である。それらの農産物はみな、日本の農業がグローバル経済の波に呑み込まれている現在、いやナショナル経済の中の他の地域の農業と競争させられても、なかなか太刀打ちするのが難しい品目である。大分県特産のカボスにしても、九重野から消費地の竹田市や大分市に運び出すと、一二〇万円の売り上げに対して四〇万円の輸送費がかかっているという。

なにしろ、九重野は標高が高い山村であるばかりか、そこには谷の異なる七つの集落があつて、それらを全部合わせても、総世帯数一八九戸、総人口は四五七人である。

地域信仰の拠り所として緩木神社があることにより、かろうじて一つの山村のかたちを保っているが、この九重野地区にはいま、ひとつの小学校も、郵便局も、駐在所も存在しないのである。

地区には二人の小学生がいるが、かつては存在していた小学校(分校)も統合されて、今では10キロメートル先の竹田市の小学校に、両親が毎日届けているという。

地区人口の五八%は、60〜70歳の高齢者で、まさしく限界集落である。ここに住んでいる人々は、九重野のことを「生涯現役村」と気概をもつて呼んでいるが、あと十年もすれば70〜80歳になるそのときなお、気概を持ち続けられるかどうか。

限界集落というのは、たしか年齢60歳以上の高齢者が50パーセント以上を占め、これから人口増を望めない集落のことを指している。日本にこれら限界集落がいくつあるか知らないが、山村の殆どはこれに属するだろう。

これらの限界集落では、まず小学校が廃校になり、駐在所が閉鎖され、そうして小泉政権の郵政改革によって特定郵便局が廃止された。郵便局が廃止されれば、地域の金融機関がなくなるということである。村人は生きてゆくために、村を捨ててゆかざるをえない。

それでも九重野の人びとは、農業しか生活手段がないため、十年余り前から集団営農へと取り組んできた。一時は無責任なジャーナリズムによつて、日本にも「人民公社」があるなどともはやされた。これは、平成九年、集落の農地を一括して「受託組合」が借り受け、六人のオペレータが共同農業を行うシステムである。

だが、その六人のオペレータの一番若い人が、今六十歳に達している。農業することにも生き甲斐を感じているから、その人とはとも六十歳には見えないが、あと十年たてば七十六歳である。そのとき、限界集落に希望はあるのだろうか。

それに「受託組合」はそのオペレータ年間雇用することができない。農業は年間を通して仕事があるわけではないし、またそれだけの収益が上がるわけでもない。それゆえ、仕事があるときに、日当一万二千円で雇用されるだけである。この「受託組合」も国の補助金なしには運営出来ないという。

補助金の最大のものが減反費で、これを使って、米ではなく、大豆(青大豆)を栽培し、その青大豆が村の特産品となつている。しかし、豆腐は本来的に日持ちしないので、朝三時起きして豆腐を作り、竹田市まで朝一番に届けなければ商品にならない。商品として売れたところで、輸送費が高つくので収益が少ないことは、さきにかのべたとおりである。

このような困難に耐えて、九重野の人び

とは山村に住み続けているわけだ。それは、ここが自分たちの生まれ育った郷土(トリ)であるからという、一種のパトリオティズム(郷土愛)によつていられる。政府は、そのパトリオティズムによつて、国家が十分に支えられていることを深く認識しなければならぬ。日本の風土が美しく保たれていることも。

日本の山村に人が住まなくなれば、山は荒れ、保水の役割を果たせず、また川は補修されず、洪水を引き起こすことになる。それは、北朝鮮の現状を引き合いに出さずとも、容易に察知できることだろう。

松本先生は、日本農業の将来について「近代の工業中心の文明観それじたいの変革なしには展望を描けないだろう」といっていますが、このことは農業に限らず「競争に最後まで勝ち残った一人だけがすべてを手に入れる。つまり「金こそ命」という、グローバルズムのひとつの考え方(文明観)こそ、根っこから考え直すべきでしょう。

幕末、開国とともにやって来た外国人は、この家にも季節ごとに花が咲き、貧乏を恥と思わず規律正しく子煩悩で、心優しい人たちが日本人であると絶賛しました。

中国の四川省生まれで、かつては毛沢東の熱烈な信奉者だった石平(せきへい)さんは、来日して京都の嵐山辺りを案内された時の景色の素晴らしさや、本屋さんに中国の古典が沢山並んでいることに感動し(中国では、論語などは読んだり教えたりしてはいけないのだそうです)、この国は世界で稀に見る自然の美しい国であり、孔子の考え方の真つ当な継承者であるとの思いから、昨年暮れに日本の国籍を得て、晴れて憧れの日本人になりましたね。

また、最近、長女のメール友達のオランダ人が観光で来日した時に、ラッシュアワーの電車に、順序良く乗り降りする乗客の様子が不思議だったらしく、「何故そうなのか」とメールで聞いてきたそうですが「当たり前」のことを説明するって難しいのよねえ」と言っています。「我れ先に」ではなく、「どうぞお先に」の心が、結果的に整然と乗り降りできるということですね。世界中で当たり前の事と思つていたのですが、日本だけが違うということなのです。この国は今、経済も政治も大変な時に見えますが、まだまだ日本は大丈夫だと思えます。